

地域情報（県別）

【香川】 ゲストハウスやゲームクリエイターのコミュニティを運営-渡辺大・三光病院医師に聞く◆Vol.2

3つの商店街が協力、ゲームがテーマのお祭りも開催

2024年12月6日（金）配信 m3.com地域版

高松市の三光病院に勤務する精神科医、渡辺大氏は白衣を脱いで地域でも活動している。2018年に古民家を購入・改装してゲストハウス「燈屋」を開業、同年にはゲームクリエイターのコミュニティ「讃岐GameN（げーめん）」も立ち上げた。「香川に魅力的な場をつくりたい」渡辺氏の思いは地域の人にも伝わり、同市の3つの商店街を舞台としたゲームのお祭りの開催までこぎ着けた。渡辺氏が推進する地域活動の内容と手応えを聞いた。（2024年10月29日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)



渡辺大氏（本人提供）

——渡辺先生は三光病院に勤める傍ら、地域活動にも注力しています。まずは、2018年に開設したゲストハウス「燈屋」についてお聞かせください。

インドでの経験を経て（詳細はVol.1を参照）、「香川で場づくりをしよう」と考えたときに浮かんだのがゲストハウスの開設でした。多様な人の受け皿として私の価値観に合いますし、シェアハウスではなくゲストハウスにすることで外から人が来られる状況にすると、コミュニティの風通しの面でも良いのでは、と考えました。

高松市の瓦町駅から徒歩5分ほどの場所にある古民家を購入して改装し、2018年にオープン。現在は20代を中心に40代くらいまでの旅行者が利用しており、中には海外からお遍路などを目的に宿泊する人もいます。

大分大医学部時代に体験した交流イベントを参考に

——燈屋のホームページによると、宿泊者以外も参加できる交流の場を設けていたり、近くの書店と出会えたりする取り組みも行っていきますね。

予約不要の「あんどん」は毎週水曜日の午後7～10時に開いており、500円と食事一品を持ち寄っていただければどなたでも参加できます。これは、私が大分大学医学部に在籍していたころ、大分駅前商店街にあるオフィスで行われていた交流イベント「水どん」を参考にしたものです。私も学生のころに参加したら楽しかったんですね。

あんどんでは香川に移住してきた人たちの参加が多く、友達づくりに一役買っているようです。私自身、燈屋の運営では自分が医師とは伝えておらず、コミュニティーでは「渡辺大」として皆さんに接してほしいと考えています。あんどんを通して思うのは、私のように、肩書や仕事の垣根を越えた交流を求めている人が少なくないんだな、ということ。

書店を絡めた取り組み「本泊」は、燈屋がそのときどきに設定したテーマに沿った本、今で言えば「10代の自分に贈りたい本」を近くの書店「ルヌガンガ」さんで購入し、燈屋に寄贈していただくと一泊できるというものです。

「未知との遭遇」をテーマとした同店は店内の雰囲気・品ぞろえともに素敵で、私自身、お店に行くと何かしら買いたい本に出会えます。「こんなにいい本屋さんは町に存続してほしい、いろんな人に知ってほしい」と思い、本泊を始めました。本好きが燈屋に集まることで、多様な価値観を受け入れられるコミュニティーの醸成にも寄与するのではないのでしょうか。



交流イベント「あんどん」の様子（燈屋ホームページから引用）

指針は「意欲的な若い子が参加したくなるコミュニティー」

——他方、渡辺先生は燈屋開設と同じ年に、県内の学生や社会人が集まるゲームクリエイターのコミュニティー「讃岐GameN」を立ち上げます。

これは、シンプルにゲームクリエイターの仲間が欲しかったから。活動により熱を込めるようになったのは立ち上げて2年目、岩手に住む20代半ばの男性との出会いが影響しています。その人とは東京で開かれたゲームカンファレンスで知り合いました。彼は岩手でゲームのコミュニティーをつくらうとしており、同じような動きをしていた私は「意気投合できるかな」と淡い期待を感じました。しかし、会話を重ねていくと彼は、「地元で頑張っている人なんかいないじゃないですか」とさらりと言ったのです。

先ほどお話ししたインドのタクシー運転手の声（詳細はVol.1を参照）と同じように、私はとても悲しく思いました。彼との出会いにより、「地元にいる、意欲ある若い子が参加したくなるコミュニティー」という讃岐GameNの指針が決まりました。現在、50人ほどが高松市内の施設やオンラインで集まり、個々でゲーム制作を進めたり、勉強会や交流会に参加したりしています。

——讃岐GameNは2020年からゲーム制作のワークショップ「最強ゲームジャム」を開催、2021年からはゲームをテーマにしたお祭り「SANUKI X GAME」を高松市の商店街で開くなど、地域にも出て活動しています。

SANUKI X GAMEは、私たちのこれまでの活動が結実した一つの形であると感じています。「人々にこの町を好きになってもらえる取り組み」を考えるうえで、ゲームイベントだと参加者がゲーム好きやクリエイターに偏ってしまい、「場づくり」として広がり生まれにくいだろうと思いました。そこで、地域の商店街とつながりのある人を通じて私たちの思いを伝えました。商店街の人からすると、私が2018年から商店街のそばでゲストハウスを運営していたので、「地域を盛り上げたい」本気度が伝わったのではないのでしょうか。2024年11月17日に開く4回目のお祭りでは、高松市南部の3つの商店街の協力を得られ、クリーニング店などにもスポンサーになっていただけました。



過去のSANUKI X GAMEの様子（本人提供）

自分のポテンシャルを生かして医師を続けていきたい

——2018年からこれらの活動を継続してきた中で、特に印象深い出来事がありますか。

燈屋でいえば、それぞれ違う地域から来て宿泊した20代の男女が意気投合、2人でよく燈屋に顔を出すようになり、結婚したことは印象深いですね。2人から相談を受けて私は婚姻届に証人として署名し、2人は結婚記念日を10月8日、「燈屋（とうや）の日」にしてくれました。

それと、燈屋のスタッフとして働いていた30代の男性がこの前、社会復帰できたことも感慨深いです。その人はなかなか定職に就くことができず、就労移行支援サービスを受けたりハローワークで相談したりしましたが、良い結果が生まれませんでした。それで、燈屋に心地良さを感じてくれたのか、こちらで2、3年働いていました。このほどご縁があり、地域の優しい社長さんと出会って就職できたことはうれしく思います。

——最後に、医師として、また地域活動家としての展望をお聞かせください。

医師としては引き続き、自分のポテンシャルを生かしていきたいです。ネット・ゲーム依存症の診療において親子の問題にも着目しながら解決を図っていく能力を高めたいですね。

地域活動の面で、燈屋では最近になって利用者が自ら企画を立ててくれるようになったのは良い傾向だと感じています。あとは、若い世代にとって価値のある場所であり続けられるよう、私が身を引いた後でも運営を継続できるようにしたい。

讃岐GameNでは、もっと社会的な存在感を高めていければと考えています。もともと、このコミュニティーは今後の時代を見据えたデジタル人材の育成・輩出もテーマの一つとしています。ARやVR、メタバースが私たちの生活に影響を与えてきている中、これらのデジタル的なインフラをハンドリングできる人材が地域に必要ではないでしょうか。多くのデジタル技術とゲーム作りには親和性があるので、その意味で讃岐GameNのメンバーが地域でも活躍し、それが将来的に広く社会的なインパクトを与えられるようになればいいな、と展望を描いています。

◆渡辺 大（わたなべ・だい）氏

岡山大学工学部を経て、2017年大分大学医学部卒。四国こどもとおとなの医療センターでの初期研修修了後、精神科を専攻。2014年1月から三光病院に勤務。地域活動にも注力しており、2018年からゲストハウス「燈屋」とゲームクリエイターのコミュニティー「讃岐GameN」を運営する。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

